



多聞漫談

北政所載不載  
二冊の内

特別  
14  
1919  
656



門イ4 1919 43  
 門イ5 1380 43



(日曜木) 日六十二月三年六和昭 (可認物便郵三第)

# 吾紙唯一の讀物



## 隨筆「春城漫談」 更に百回を續く

二百回連載が約束されたわが紙の頃における只一つの讀物、當代隨筆家の第一人者市島春城老先生の執筆にかゝる隨筆「春城漫談」は、一篇は一篇毎に感觸が上に高調され行き、今やそのクライマックスが叫ばれつゝ廿六日壹百回を算するに至つた。隨筆の醍醐味眞價値・妙處・老手は、明瞭・雅俗・長短・対・線・脚の空襲、源平・藤原・紅蓮・白、いろく、繪文せられてゐる點に在る。既載壹百回の「春城漫談」がそれで、先づ得の文藝談あり、文明地獄、生活風俗が出て來るかと思へば時にはエロ・グロにも筆端は走つて行く。山の神秘、川の咏嘆、海の暝相心に加へて「峽谷美」を探ぐるが如く、深慮あり、斷橋あり、時に隱居千仞、時に平地坦々、牧童の牛に飲うれば付原の花を肩にして歸るの趣きも見る。殊に百回以後一二百回に至る百篇は、隨筆選擇に先生最も苦心の所、蓋し全讀者諸君をして斷然、隨筆趣味にさらに一躍進たらしむるものがある。尙ほ付け加へたきは、長きに亘る前載篇を累ねるに從ひとかくダレ氣味を生じがらものだが、この「春城漫談」はそんなものとは全く違を異にし、いよく出で、いよく奇也、だ。さすがに隨筆王といふ。ただはある。前百回分は春城老先生の執筆と申しても、實は先生手録の雜筆より抄出、筆記を編輯し、適當したのであつたが、これからの百回は事實、先生の執筆にかゝる。既に入手の原稿六十餘篇に上ほり讀者垂誨の感觸少くない。この隨筆先生には著者として刊行の意絶對になし。若くば、さらに一愛讀の樂を賜はらん事を。

北越新報社

昭和十八年十月五日  
 市島謙吉

No. 101

刊夕

北越新報

發行所 東京市本町二丁目 電話 二二二二

春城漫談

市の回顧



治八年である。そして銀座に煉瓦家の出来たのは、それより一年

後といはれてゐる。もつと建築に着手したのは明治五年頃で、表通りから裏通り一等、二等、三等と等級を別けて建築が出来上つたのは明治七年で、自分の出来上つた時には出来上つてハヤハヤの家屋が建て並び、恰も外灘に行つたかのやうに田舎生活を感した。當時煉瓦の家屋が珍らしかつたので、この新開町を銀座といはずんば五といふが通り名であつた。時の政府は堅牢な家屋を建築するの事を示すために、特に帝都の入口に文化的の標をなす、これがために百幾萬かの金を費し、それを年

刊夕

北越新報

發行所 東京市本町二丁目 電話 二二二二

春城漫談

市の回顧



運送した件数は、百五六十にも達して居る。自分は我れながら新聞社から印刷相續を受けた際に、毎日に二百回の運送を約した。なほ更に百回を續けんとする厚

み出せば二百回は何んでもないことと思ふ。そこで先づ三十冊ばかりの漫筆に多少の指意をして、運送などは新聞社の都合に任せて運送して見ると、全く失敗であつた。もつと自分の漫筆は他日新聞を著す時の材料にと、暫くまで漫筆に書きつづけたもので、人に示す心得で書いて居らないから、材料も木地其餘、一切絶へ掛つてゐない。説明も附さなければならぬこともあつたり、多少の感傷を書き添へれば物にならぬものを、それを全然読んだりして、朝はど暇なれないものを寄るに感傷したことを悔ひ、且つ懶惰の爲に漫筆の中には往々、自家の私に關することも混してゐる。斯かるものを公けにすることは甚だ感傷を感ずるが、併し敢て自家宣傳の爲にはなく、漫筆のやうな一家の私記には、自己に關する記事のあるのは免れ難いこと、それを全然省かなかつたことは手落であつたが、なほ再考して見ると、何事も自己を離れては語り難く亦誰つても讀まないものであるから、多少自分の際などには關することは漫筆に免じて御容赦を乞ひたい。自分としては朝かても自分の際が、極端の大記事たる新聞紙に載ることが無上、仕合せであるのだ。







刊マ

北越新報

No. 109

春城漫談

市崎一夫



外人の日本

來の痛快さである。大體昭和の後へて出したので、かの國人が如何かの國語新聞紙が日本畫に對して、報告書に添

近年外國でも日本畫を特に研究してゐるものがあつて、中には家外日本畫を研究し、ともすると邦人の及ばぬ觀察をしてゐるものもあるが、それはもつと論議の少くない大體まだ日本畫を研究するまでに到つてゐない。無理もない事である。かれ等伊太利人の目には日本畫は原始的のものとされ、あ

No. 108

春城漫談

市崎一夫



杖道樂

の手續を確た杖とか、旅行記念の杖だとか、握りに意匠のある杖だとか、さまざまあつて一々擧げ

これが精巧であれば他の部分はどうでもよいやうに思つてゐる人もあるが、そんな人は骨董においても杖において幼稚の人で、共に認するに足らない。握りは、繩索のそれと同様のもの、取りつけられ





刊夕

北越新報

所行發 日二町上之 社報新北 報吉留 郎吉留

No. 111

春城漫談

市崎義成



津端道彦氏の 繪具研究

津端道彦氏は戦後美術界の巨匠として知られる。その研究は、戦前の洋装に由来する。...

されたが、最も自分の注意を惹いたのは純白の繪具であった。この繪具は最も苦心を要したとて、胡粉でない。胡粉は年を経ると酸化するとはいはれてゐる。氏の工夫にかゝるものは決して酸化せず、顔料に用いても断じて酸化の患がないといはれてゐる。...

が偶然後地目出されたものも併合せいでつて、津端氏の語に西洋人の繪具の研究のうちにレッド、サンド(紅砂)の名が見えてゐる。これも、かれも紅の字を戴いてゐるの偶然か、否か判別できないでもない。氏は在りては油繪の具を早く就かす事には大分苦心し、漢方の醫書まで洗練して、漸く千草といふものを洗練して、漸く千草といふものを洗練して、漸く千草といふものを洗練して、...

を認めなかつた。全然降参のなき砂に埋まり、寒も寒に晒れなげれば、かくも完全を得た事かも知れぬが、繪具に着色しない工風があるのではあるまいか。唐時代の支那の文化はベルナアあたりの西洋感化を受けてゐるから、繪具の如きその感化がないとはいへぬ。日本でも早く上代に繪具は唱へる油繪の具があつた。油繪の具は西洋のみに限らない。用いた事がありとすれば、津端氏の研究は繪具を古土佐に復したものとひひ得よう。...

堀内道彦翁をその書に訪ふたとす。氏は翁が譯筆を揮ひつゝある「マクベス」の事に及んだ。翁は原書をひらき、巻頭手負の武士が勝軍の注進をなすところを共に讀んだ。翁云く、西洋の繪具研究者はこゝについて一説をなしてゐる。全体繪具の注進に手負のものを用ひるは不吉である。且つ手負のものをしてかゝる長セリフをいはしむるは不吉である。おそらくこの説は後人の眞入であらうと。この説一應尤もに聞こゆれど、實は翁を解しないものゝ説である。...

逍遙翁とマクベス

刊夕

北越新報

所行發 日二町上之 社報新北 報吉留 郎吉留

No. 110

春城漫談

市崎義成



新らしい言

近來のやうに劇場的な言葉が多くなる。用ゐる事はない。昔は最大級の言葉が若く人達に使はれ、大いにとか、驚かすとか、是もとか、一驚かすとか、さまでの事でもない。...

事が出来ないやうになつた。人を刺すに足る言葉なればどんな驚愕な、粗硬な、醜態な言葉でも使はるやうになつた。一時汽車などに「驚かす」といふ言葉があつたが、それは驚かすであつて、いまは「驚かす」の字が上になつてゐるやうになつた。...

はれ、確にそなたといふのが語氣が強いとあつて、断然そなたといふ必ず行くといふを強めて断然行くなどいふて、断然の語が會話にも文章にも無難に用ゐられて来た。...

つて、君らの如きオライ義者。これからオライ、オライと呼ばねばならぬかといつた事がある。...

名僧の川柳

李太白翁の馬に騎つまづき

李太白翁の馬に騎つまづき

李太白翁の馬に騎つまづき

李太白翁の馬に騎つまづき

李太白翁の馬に騎つまづき

李太白翁の馬に騎つまづき

李太白翁の馬に騎つまづき



北越新報

所行發 市調長 社報新 報社北 郎吉留 留佐 人副印

No. 114

春城漫談

市公と淀君



坪内逍遙翁の病中吟
坪内逍遙翁に關して和歌を詠じ、俳句を物さるるも決して人に示されぬ。翁は文章において往くとして可ならざるな天才を有してゐるから、和歌でも俳句でも、いさゝかつとむれば、面してはよくなるにしても、如何に苦悶に至るの必然だが、翁は決して自分の心を吐き出す。如何にして吐き出すかを、また他人に直しを求めぬ。平生云ふ、他人に置きたいの主張が聴かない。自

北越新報

所行發 市調長 社報新 報社北 郎吉留 留佐 人副印

No. 115

春城漫談

市公と淀君



豊八公と淀君の短篇劇
大正三年十月の或る時坪内逍遙翁と會食中、その頃逍遙翁が開演中の東條隆彦の「市公と淀君」の劇を見たかと思はれたので、多忙に紛れて未だ見ないと答へたところ、翁はいつもと違つて熱心に今度のだけはどうぞ、見せてやつてくれと頼むが如くいはるるので、既々機子を開いてみると東條の市公は如何にも上出来だと

珊瑚

昔は地中海に珊瑚の産地を産した日本が古渡りといふて珍重するの

戀

戀は一種のスパークの如きものだ一瞬かすなはち千年代。實行者は

チユリツプ

人間は時々流行といふ一種のマニヤにかゝる。それが金銀に絡むとそれが頗る猛烈である。昔ではわが國に兎が流行した事がある。またいろ／＼の小説が流行した







No. 119

# 北越新報

社報新報  
社報新報  
社報新報

## 春城漫談

### 市山長

#### あこがれの詩



屋島、増の浦、並比羅神社等は昔の第三回目で、今より十六年前の頃である。大正三年に遊んだのであるが、前年訪問の時に比すれば面目の改まりたるものが、一に足らなかつた。

津田町東端から鯉羽村の西南へ東眺む見ゆるやうな作られたのだ。五十三次を眺めたといふが、海は全然遠くつてゐる。近頃、徳島縣へ通じてゐる。津田へ行く途中志願を過ぎ、平賀内川の西側である事を思ひ出した。その家もまだ存してゐる。また、茶人のやがた、まじいふ屋敷の産地も、志願浦真田といふ説もある。一、行の譚人に置いたら、それは筑前遠賀郡の産地であつた。讃州のは、同名異地だとわかつた。

恐ろしい。もち論この史書は、船側でも叩いてみなければならぬ事がある。古く屋敷を眺ふにも、柱など叩いて談笑する必要があらう。史書は往々誤却される事だが、妖怪の材料となるなど危険の甚だしいものである。

### 坪内逍遙翁の祖先

坪内逍遙翁といふのは、往々原作的精神を失ふもので、特にその氣格風調を露出する事は甚だしい。然るに菊池三溪が馬場の八犬傳中から傑出したる、芳澤閣上の勇士組の一語を讀した漢文は、その文體にしてしかも原文の持ち味を遺憾なく移し來り、人をして讀みなが

### 八犬傳の漢文譯

漢文といふものは往々原作的精神を失ふもので、特にその氣格風調を露出する事は甚だしい。然るに菊池三溪が馬場の八犬傳中から傑出したる、芳澤閣上の勇士組の一語を讀した漢文は、その文體にしてしかも原文の持ち味を遺憾なく移し來り、人をして讀みなが

No. 118

# 北越新報

社報新報  
社報新報  
社報新報

## 春城漫談

### 市山長

#### 合理の怪談



今時不思議物語や妖怪談なんどいふ説を講ぐに、大團圓はどうしても合理的でなければならぬ。その材料はいた

き話を聞いた事がある。高瀬の白鳥は如何にも猛烈で、水を噛む音があり／＼と聞へるといふてゐる。外部から見れば、ほとんど細孔に外見し得ないのに、内部は全然洞になつて仕舞で、棟木でも、宛から紙で細工したもので、如く中は空だといつ何時、崩壊しないともいへないほど甚だしい怪談をうける事がある。それに気が附かなければ風で倒るゝまでもなく、湧り掛つただけでも柱が折れ、それに支へられてゐる棟木が、時に崩壊するやうな危険があると聞いた。

坪内逍遙翁といふのは、往々原作的精神を失ふもので、特にその氣格風調を露出する事は甚だしい。然るに菊池三溪が馬場の八犬傳中から傑出したる、芳澤閣上の勇士組の一語を讀した漢文は、その文體にしてしかも原文の持ち味を遺憾なく移し來り、人をして讀みなが

### 坪内逍遙翁の祖先

坪内逍遙翁といふのは、往々原作的精神を失ふもので、特にその氣格風調を露出する事は甚だしい。然るに菊池三溪が馬場の八犬傳中から傑出したる、芳澤閣上の勇士組の一語を讀した漢文は、その文體にしてしかも原文の持ち味を遺憾なく移し來り、人をして讀みなが

### かけ言葉

これも坪内翁との話であるが、翁の語に、言葉の上の洒落は今の文學家達だこれら半、終にかげ言葉までも無用として非難するけれども、誤にだけはかけ言葉は必要である。かけ言葉のために、文藝が荒蕪になり、味も加はり、またリカルにもなる。かけ言葉はわが國語の特徴であるから、一概に排斥すべきでない。西洋にもかげ言葉はあつたけれども、日本の如くうまくゆかぬ。拙稿も幾つか言葉を用いたが其は、拙でない。拙稿が原文以上と自負し得るところは、只かけ言葉の讀みであるのみと

# 北越新報

社報新報北越  
社報新報北越  
社報新報北越

No. 120

## 春城漫談

### 市の表裏



日本の事が日本の文壇になく、却て外人の書いたもので教へらるゝ事が往々にしてある。和田克徳といふ人が著した『切腹』を讀んでみると、アストン・ブルュー、ブックに出てゐるといふてそれを譯出してゐる。すなはちこの事も外人の文壇に依つて教へらるゝ一傑である。その譯文は左の如くである。

時は明治二年(西紀一八六九年)新後の日本を如何なる方面に推し進めしむべきか、に就ての論議

二百〇九名であつたのであるが、採決の結果は僅に百九十七票の差を以て勝つた。否決されてしまつたのである。而して彼等は僅に三名、他の六名は彼等何れの意思をも表明しないで投票を棄置してしまつたのである。鋭上の問題に關しての討論に於て、次のやうな事が高唱されてゐる。『苟も切腹なるものは、我國民精神の殿堂であり、道義行の表現である。』『我帝國に於ける一大裝飾である。』『國家組織の支柱である。』『至純な名譽心の養成と國家の支柱とも目するべき至分際國間に流るべき美はしき國情交流の源泉を培ふものである。』『宗教心に支柱であり、道徳心の拍車である。』

『切腹』といふのが如何に強く、且つ感服すべきであるかは世界に類例のない切腹に對し、明治維新になつてすら眞實心が疑はれる處であつた事が、これによつて疑はれる。小野清五郎は切腹論を唱へたためであつたか、その後開もなく刺客の擧及に懸れたといはれてゐる。明治三年に新報編輯を定めた時でも、自刃を自裁と文字を改めたので、子族の子孫には厭を語つた。明治六年改定憲法を制定するに當りて初めて切腹の體裁をもつて自裁の形に代へた。これから法徳面より自裁形が除かるゝ事になつた。

『校正難』  
書物の出版に先づ校正は頗る重大の事件である。著者自らが校正して誤りなきを保し兼ねる。況んや他人の校正におよばせや。別して古書の場合の場合においては、校正は、頗る難事である。動もするに底本に誤謬があるから、校正の役正は、その誤りをも正さねばならぬ。わが國の如く、漢文に書かれた書物の多い國には、その書の複製の時校正が實に厄介である。なせといふと、誤謬などに誤りがあつて、どうしてもそれを正す、特に電氣會社の道をたどつた者はこの難を見せんとせり。この難より十丁餘りも行きたりと當りし所に、新たに作りたる家屋の軒をならせたる一軒あり、所謂『新築』に『舊蹟』を併せ、此は、人馬騒動といふ。近年火災のため、寺社の外悉く焼失して今漸く復興したれど、僅に戸數十軒を數ふに過ぎず。一幸に想ふに、此の間に明治天皇東幸の御御休養の處、と號したる標札が置いてあつた。これに見ても當時この宿禰の街道有數の處であつた事が知られる。これより舊街道に出づ。道はずば石をもつて敷きつめられてあるのに氣が附いた。これは又久年間、公武合體の政策により將軍家、皇族和宮の條條を請へし、大修理を加へたといふが、道の直がすなはちそれだ。敷石は三島にまで及んでゐるといふからなかなかの大地の所であつた。今は空面が露れ、敷石の間隙に草生ひ並び、頗る不潔な所である。敷石の間に草生ひ並び、頗る不潔な所である。敷石の間に草生ひ並び、頗る不潔な所である。

『校正難』  
『校正難』  
『校正難』

# 北越新報

No. 121

## 春城漫談

### 市の表裏



箱根の舊道に雲介歌を聴く  
時は大正四年八月の末、娘を伴ふて箱根の湖にゐた。娘が舊道で舊街道を種、湖の湖にいた。娘が舊道で舊街道を種、湖の湖にいた。娘が舊道で舊街道を種、湖の湖にいた。

『市の表裏』  
『市の表裏』  
『市の表裏』











市島一風

No. 127

春城漫談

北越新報

櫻の良否を見ると面にその國の文...

大震災で東京が全滅した時、櫻と...

省かれ、經濟的に出来て同時に櫻...

までもない。日本のやうな和らか...

致を損する譯のものではない。石...

北越新報

No. 126

春城漫談

市島一風



人間の鮮血が花に注がれその色が...

が立つて、乳汁が注いで百合合...

神話の材料に花が多く取りこまれ...

橋

No. 129

春城漫談

市崎三蔵



西洋の橋

橋を研究したのは建築技師、な... 然し橋を趣味上から専ら観察して

北越新報

日丁... 社...

西洋を疑いかけ、各々の橋を見て... 歩き、技師的でなく興味的に有る... 多くの橋を見て、嘗て大正三四

No. 128

春城漫談

市崎三蔵



橋

猿はこれに文明人のみならず、... 猿族にもあつたに相違ない。文明

されてゐる。すなはち、たとひ、... 木の皮などで、極めて粗末に橋を

北越新報

日丁... 社...

各種の橋

次に架橋の様式を述べようとする... に、日本においても種々多岐であ









北越新報

No. 132

春城漫談

市山表



橋 六
この話の序に橋の一二を挙げ加へるが、橋といふのは、人工になつたものでなく、自然で出来るから橋の役をなすものをいふのである。山中など...

所行發 日丁二河上坂市國長 社報新誌北社社行式 郎吉留議佐 郎吉留議佐

北越新報

No. 133

春城漫談

市山表



橋 六
この話の序に橋の一二を挙げ加へるが、橋といふのは、人工になつたものでなく、自然で出来るから橋の役をなすものをいふのである。山中など...

所行發 日丁二河上坂市國長 社報新誌北社社行式 郎吉留議佐 郎吉留議佐

橋の序に橋の一二を挙げ加へるが、橋といふのは、人工になつたものでなく、自然で出来るから橋の役をなすものをいふのである。山中など...

橋の序に橋の一二を挙げ加へるが、橋といふのは、人工になつたものでなく、自然で出来るから橋の役をなすものをいふのである。山中など...

No. 135

刊マ

北越新報

發行所 北越新聞社

春城漫談

中島力造博士と語る



長岡の温泉へ浴する事が絶望で、この時も長岡から歸京の途上であ...

の誠を交へた。その中に博士が前年國道道取調の爲の暇米へ出...

やうだ。自分も、博士に受けた...

志料 吾郷土の一

No. 134

春城漫談

市山琴の因縁



訪前の酒家にて同姓の家がある。この家にあるのは昔酒大瓶が...

があつた。その人は西城と號したある時、西城の琴を遺して、竹...

井氏は辭し去り、丹吳氏は何を...

昔の灰設

徳昌寺



















刊夕 北越新報

所行發 町市開長 報新上北 社報新留 郎吉留 印

No. 146

春城漫談

市崎一夫

中島廣足の遭難記事



文政十一年八月九日は九州に大津波があつて、...

この遭難は真に文苑の珍事たるに足る。遭難の遺稿は原文に就て...

とあり、危険なることがこの記にて知らる。一旦島に上陸して...

かにははの海邊の中空の月を伴ふて近江の琵琶湖に月影師...

とあるが、これは一佳話として傳ふべきである。すべからずこの...

刊夕 北越新報

所行發 町市開長 報新上北 社報新留 郎吉留 印

No. 147

春城漫談

市崎一夫



て見るものであつた。嘉永二年七月十二日...

この遭難は真に文苑の珍事たるに足る。遭難の遺稿は原文に就て...

とあり、危険なることがこの記にて知らる。一旦島に上陸して...

かにははの海邊の中空の月を伴ふて近江の琵琶湖に月影師...

とあるが、これは一佳話として傳ふべきである。すべからずこの...





No. 153

刊夕

北越新報

所行發 市同長 社市會式 報北社 部新報 郎吉留 郎吉留

春城漫談

市の料理

上方料理 (下)



茶式では魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

No. 152

刊夕

北越新報

所行發 市同長 社市會式 報北社 部新報 郎吉留 郎吉留

春城漫談

市の料理

上方料理 (上)



魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...

魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く... 魚の頭尾は取り除く...







No. 159

刊夕

北越新報

所行市長 社報新北 社報新北 社報新北

春城漫談

市の意義



ではないが、僅に標本として少し備はるまでの事で、此等の圖書も、岩崎文庫とか、室宮の文庫とか、専ら出入の出来ない所には相當

以上挙げたものは普通標本の圖書類を、概か外れたものだが、純然たる版本で有力なる圖書に類してゐるものが多い。宋元葉など云ふ書物も、無

向は圖書に備はらないものがあつて、それは歴史の類にわたるべきである。その非圖書品であるものも、多し、中には珍奇有用のものも、

市にあらはれ、初めてこんなものがあつたか、その一類の数は千二百に上るほどあつて、一種の研究

資料にもなる。これ等のコレクションは、僅に圖書館のその部類のものを、例へば、岩崎文庫の

門圖書館に限り備ふる可とするものもある。日本に於ては、法書、印書、金石拓本、

へつた、標本のものが、個人の手に移り、それが遺失されてゆくのは如何にも遺憾の事であ

は、今具体的にどんなものが圖書館に備はるべきか、を詳細に列挙することが出来ぬ。概して云ふには、餘り多幸である、併し、それは云ふことが出来る。先づ、因習的に考へられてゐるものに、左の如きものがある。

一、古文書

一、浮世繪

一、法書

一、印書

一、金石拓本

一、繪巻物

一、書鈔本

一、法書

一、印書

一、金石拓本

一、浮世繪

一、繪巻物

一、書鈔本

一、法書

一、印書

一、金石拓本

一、浮世繪

一、繪巻物

一、書鈔本

一、法書

一、印書

一、金石拓本

一、浮世繪

一、繪巻物

一、書鈔本

一、法書

一、印書

一、金石拓本

一、浮世繪

No. 158

刊夕

北越新報

所行市長 社報新北 社報新北 社報新北

春城漫談

市の意義



は、今具体的にどんなものが圖書館に備はるべきか、を詳細に列挙することが出来ぬ。概して云ふには、餘り多幸である、併し、それは云ふことが出来る。先づ、因習的に考へられてゐるものに、左の如きものがある。

一、古文書

一、浮世繪

一、法書

一、印書

一、金石拓本

一、繪巻物

一、書鈔本

一、法書

一、印書

一、金石拓本

一、浮世繪

一、繪巻物

一、書鈔本

一、法書

一、印書

一、金石拓本

一、浮世繪

一、繪巻物

一、書鈔本

一、法書

一、印書

一、金石拓本

一、浮世繪

一、繪巻物

一、書鈔本

一、法書

一、印書

一、金石拓本

一、浮世繪

一、繪巻物

一、書鈔本

一、法書

一、印書

一、金石拓本

一、浮世繪

No. 159

春城漫談

市の図書館



以上挙げたものは普通版本の圖書類を...

北越新報

所行發 町市之坂市岡長 社報新越北 社報新越北 社報新越北

ではないが、僅に標本として少し...

荷くも文庫と名のつく所にあれば...

も直に想ひ掛けるのは自分より...

るに由ない為め通例圖書館に入ら...

資料にもなる。これ等のコレクション...

門圖書館に限るべきである。況んや...

No. 158

春城漫談

市の図書館



私は今具体的などんなものが圖書館に...

この中には幾高うして書身に得難い...

る。これを帝大の圖書館のもの...

つて多く市上にはあはらざる。併し...

に當る人は或る特別の價値...

つては、圖書は用だたぬ...

刊夕

# 北越新報

所行發 岡長  
目丁二町上北 社報新西北  
社報新西北 社報新西北  
社報新西北 社報新西北

No. 160

## 春城漫談

### 市の1歳

#### 亡びんとする 木版彫刻



日本の木版彫刻は世界に誇り得べき固有の藝術である。日本の文化がどれほどの藝術に富み、所があるか、それはどこまでも無からず、洋風の印刷術が折れた結果、惜しいかな今は追々この藝術が亡びかかっている。自分は他、の同人と十数年経書の経験を積んで、現存東京の木版彫刻組合のもの、折られて、彫刻藝術の實際を平素の讀者の眼にもそれにする。彫刻藝術

には字彫があり、輪彫があり、彫があつて、各々の業を分つてゐる。彫とは人物の肉體部を彫る。彫るものを云ふので、これが一番むづかしい。即ち第一位を占むる上職人である。これが今日果して幾人あらうか。字彫と輪彫とを兼ねて彫るものは勿論八人ある。印刷の方も彫りや色づりやの二つに分れてゐるが、今日では彫の彫は極めて少ない。昔は御家人が内職に彫をやつたが、輪彫や彫彫などは、矢張り職工で無ければ、出来なかつたのである。御家人のやつたのは、大抵字彫であつた。

彫は一寸考へると機械的のやうに思はれるが、實は矢張り精神的修養を要するその道のものは云つてゐる。美人彫の上手と評はれた

成る彫工は常に遊里に出入した。人はその放蕩を嘲つたが、實は成るべく若い女に接近する機會を作つて氣分を若やがせる爲めであつた。彫師も氣分を向ふこと創作家や作家に勝らぬのである。版木を見れば、老練の彫師の彫つたものが、壯年の彫つたものと、老練の彫師は云ふに出来る。

版の彫方に就て古今多少の懸差がある。莫あたり、若くはそれより以前の版木の存してゐるのを見れば、大體頗る懸差がある。何故かと聞いて見ると、彫方が後世と違つて、後世は刀を先づ字や輪彫の輪彫に用ひ、餘白の處はノミで淡らうが、昔は字や輪彫の輪彫に先づ刀を用ひ、餘白の中央にノミを入れて、周囲に淡らう彫つて行くのを彫とした。後世よりはいくらか骨が折れ、搬運も欠いたわけである。彫師の云ふには、版を彫る時は、真正に版木を削るの上に置き、字も彫も正し位置に置いて刀を彫ふことを例とした言ひ換れば、板木を彫師すれば彫

りやすくあつても決してそれをせぬことが法となつてゐた。これは彫式に換はれてゐるかにも見えるが、そんな調子ではなく、斯くして彫らねば、刷る場合に墨に染みが出て来る。刷毛のサベキもよくなる。随つて刷つた結果がよくないからだと云ふ。

今では眞鍮板で彫つたものをガラスより好んで、それを版に貼りつけるのだが、このはがした版は薄いのを向ふ。勿論彫るものもこれをヘガスのにも、彫師の手を要するのだ。理窟から云ふと、版を彫る彫師に、同じ物を彫つて幾枚か彫し、それを色をそれの版の下輪に赤つればよいやうであるが、實際は同じ物を五枚彫せば五枚共多少の相違があるのだからと云ふので、それに依つて、トング喰違ひが生ずると云ふのである。如何にも全く時を同じうした眞實でない以上は、いくらかの違ひはある筈である。彫師が眞實にのみ依つて、實物を彫らざるに、之に則るのこの故である

No. 161

## 春城漫談

### 市の1歳

#### 亡びんとする 木版彫刻



彫師がビツタリ合はねばならぬ。浮世繪のとき色版をいくつも重ねるものには、摺りが尤も大切で、且つ熱感を要する。板を重ねるに就ては、兎もすると板と板と

彫師と姉妹關係のあるのは摺師である。彫師がいくらか長でも摺りがよくないれば、彫師の成績が決して摺師に任せられる。だから彫師と摺師とは同心一体である。か、唄ひ違つて吻合しないこともあつた。唄ひ違つて斯かることは許さなれない。美人繪の色版の内、口紅だけを彫るに、他の紅色と異なるために一版を要するが、僅かに

彫だけを彫るのであるから、少しでも地位が外れると全局のブチこはしとなる。上方では面彫がつかへ、色版を彫るが、江戸ではそれは版でないと云ふて取らない。流石に江戸の摺師はそこに見識がある。熱達の摺師はそこに手におつから尺度があつて決して過つことがない。色の濃淡に就ても、彫の懸差が大なる關係をもつ。人間の柔かい手で、うまく加減するのでそこに濃淡の能く得ないフツクリした味が出る。繪の原作に比して、幾等優れたものが彫られるのは、全く摺師の働きである。

摺師の武器とも云ふべきハレンと彫師の製作を聞くに、その用ゆる材料によつて三種に分かる。第一

は竹の皮の彫師をより合せたもので、これが最も廣く用ひらる。第二は摺紙(コヨリ)をより合せたもので、これは彫り易いもので、アタリ(ヘリカキ)をより合せたもので、(ヘリカキ)をより合せたもので、金銀箔を彫る時に使ふ。材料が何んでもあらうと、四本摺、八本摺、十二本摺、十六本摺と、適當に組んで風により合せ、それをうづ巻の香の形に巻上げ、更にこれを竹の皮で包むのである。包み方にも呼ぶがあるといふ。すべてより方は摺師の破れるほど要する。

八本摺が一番使ひ頭だとして、摺紙ハレンはもと彫師職人の秘傳であつたが、今は廣く行はれてゐる。

摺紙は刷毛の一種で、摺りに使用する。大きさは三寸乃至三寸五分。馬のウリ毛で拵へたものを、摺師の手で毛先を焼き、傾皮でその毛先を焼く。天竺紙のごとくシナヤカにして使ふ。中本から大摺紙まで、縦に四度、横に三度刷毛を使ふのが定法である。色摺用摺紙は大小幾種か要すけれど、概して寸法は摺紙よりも小さい。

摺りのツケ摺は、折れ墨を彫るから一年位の所が最もよい。彫り古くなると、彫が薄らぎ、彫り易くない。彫物には下アと稱する先等摺紙を用ひる。色摺りの摺具は、摺紙を突かせたり、摺紙に水筒を突かせたり、刷毛の代りにタンポを用ひたり、ハレンの代りに筆でこする場合などもある。

洋風彫師に感ぜられ木版彫師のびやくことを慥し、吾々は特別保護をなすべしと曾て主張したこともあるが、當業者に聞いて見ると、そんなことは進歩維持が出来ないものでないと言ふてゐる。全体これは生活を援けて保護するので、摺師の年俸も昔は五年七

北越新報

所行發民 目丁新 社報新 郎吉留 郎吉留

No. 162

春城漫談

市山一畝

生殖崇拜の餘風



今では人間の性本能から生ずる行動... 生殖崇拜の餘風... 春城漫談... 市山一畝... 生殖崇拜の餘風... 春城漫談... 市山一畝... 生殖崇拜の餘風...

北越新報

所行發民 目丁新 社報新 郎吉留 郎吉留

No. 163

春城漫談

市山一畝

最後の箱根關



自分箱根に遊ぶ毎、關所の遺蹟を訪... 最後の箱根關... 春城漫談... 市山一畝... 最後の箱根關... 春城漫談... 市山一畝... 最後の箱根關...

木堂翁の諾

大正十三年の夏、近衛篤磨公の二... 木堂翁の諾... 春城漫談... 市山一畝... 最後の箱根關... 春城漫談... 市山一畝... 最後の箱根關...

No. 165

# 春城漫談

## 植物界の奇



はなく、今は學術の威力で、從前  
 解のつかないものを征服しつゝ、  
 あるけれども、突然見ると不思議  
 を感ずるやうなものも少なからず  
 ある。高山植物などは登山者が見

自分は何物でもなく、植物でも  
 ない。然し、植物家からいへば、植物  
 の研究を聞くやうな興味をもつて居る。  
 植物界特殊の奇工を感して居るもの  
 だ。居るから不思議とは思はない  
 が、一尺尺の高き山地、そして荒  
 天荒地何物もない處に、花毛藍で  
 敷いてあるかのやうに、稀少の  
 植物が綺麗に花を發して居るなど

も一奇と云ふべきである。登山者  
 はこれを花畑と稱して目を眩しめし  
 めるの上のなにもしてある  
 この花は一萬尺の處にどの山に  
 もあると限らぬ。現に富士などに  
 もある。尤も麗しく咲いて居る  
 處は白馬山だ。植物學者はこの花  
 のある所を草木帯と稱して居る。  
 この地帯より高い所には地衣(コ  
 ケ)より外に植物は生へない。い  
 くら寒氣の激甚である高山でも、  
 それ相續の植物があると思ふと、  
 造化も抜け目が無い。これ等の植  
 物は雪の下に早く芽ぐんで、夏が  
 來ると直ちに花を發するから、如  
 何にも強い植物である。山中の露  
 などが水分を供給するのでその生  
 活を助けるのだが、露の爲めに  
 水がくぼんだ地に流れ込んだり、  
 前年の植物が枯れてそれが肥料と

なつて、その繁茂を助ける。これ  
 は古歌に「思ひ草」とあるのはど  
 んなものと、可なり而して調べ  
 てやつと捜し當て、舊家に掘かせ  
 た事がある。これは花がうなだれ  
 て物思ふやうな姿であるから命名  
 されたものだが、これも哀調を帯  
 びるもの、一つであらう。  
 大體で詳説のわづなつたもの  
 は、フレン、パイン、龍胆、松と  
 云ふ標が、暗闇で柱などが折れた  
 と云ふにある。これに反して、火  
 があつて燃やされたのは、樹木の  
 スズカケであつた。赤坂の池の  
 たりで自分の目撃したのは、火の  
 爲めに葉が皆焼け落ちて居たのに、  
 それが季節になると皆青々と芽  
 して居た。桐なども火に焼いた  
 ある。それに和名キリと命じたの  
 は生長を促進するため、根本より

切つて放棄せしむるからだ云ふ  
 説がある。印度の貝多羅葉は樹干  
 の葉で、それが經文などを織造す  
 るの材料となつて居る。この貝葉が  
 何んの樹の葉とも知られなかつた  
 頃に日本にたらせ、多羅葉と命  
 じた樹葉があつたのも一奇だ。そ  
 れは印度の全く別種のものでは  
 らぬが、矢張り因縁がある。乃  
 ちこの葉を火の上であぶると梵字  
 のやうな斑が現れる。これは植  
 物學者は分類して、木の木の類に  
 入れ、貝葉とは全然違ふと云ふて  
 居る。  
 不思議な思ひを爲すものは、植物  
 が枯死してから樹石を別す事であ  
 る。一事だ。澤間山に「天狗の糞」  
 と云ふものがあり、信州の小諸附  
 近の味山に「長者味」と呼ぶもの  
 のなどがこのクセ物である。全体

No. 164

# 春城漫談

## 市川一夫



田能村竹田の  
 艶書  
 田能村竹田が蘭國の野史ヒサ(飛羽)に  
 贈つた蘭文の寫しがある。既に山陽  
 が蘭文に譯した「おきこ」の條を  
 前に掲げた内縁もあるから、これも  
 シヤレた男であつた。かつて鴨河  
 のある處で飛羽を贈つたのが相識  
 けることとする。竹田は海濱を  
 語り、三説もいくらか心得てゐて

るの御まりで、終に感懐者ならざ  
 る情事も成り立つた。この條は多  
 少文字もあり風流氣もあつたので  
 遂に互ひに授けられたのである。此  
 紙は竹田が京を去つて歸へる  
 時の各親りの書状でお安くない情  
 緒を語つてゐる。  
 十三日朝かきそへ  
 十六日立、きわめ申候「お  
 きこ」は本調子にててもは  
 や手がつき候哉  
 きふは、わけてせわしき、お  
 日からのよし、わざとの御文  
 ゆふべは寝惚の影にて、くりか  
 へし、よみあかし申候、あ  
 さましの田舎人、かくあはれ  
 と見給ふは、うれしきやうにて

なかくおほくおぼえて、す  
 ずかに、なみだこぼれ候、氣の  
 ありあはせかたうは、をのこ  
 だに、たぐひなきことこそ候  
 を、かゝる打とけたる御ことば  
 け給はらんとは、夢にだも思  
 はずかし、この度きうに國に參  
 り候も、又々のほり申候心くみ  
 ゆへ、せひこしの内にのほり  
 て、花を見月をながめ、暁よみ  
 酒のみ、御あそび申さんと、今  
 よりのしみ申候、此頃の文句  
 のはしに申上候やうに、此世は  
 あだのかりまくら、思ふまゝに  
 ならぬは、常のならひに候へば  
 たゞ御心やすらかに、御わたり  
 候へかし御やまひのかさなり候  
 上候、古歌にも  
 命あらばあふも、せん世の中  
 になどしぬと思ふころぞ  
 とにかく御身を御大事になされ  
 候やうに存候、又々何よりの  
 品ども、御おくりくだされ候、  
 御思もいろ／＼とつらふいろ

にせめなされ、御うつりがさへ  
 いと身にしてみておぼえ候、御く  
 わしも、御磨石なぞいへる、  
 おもしろき浦々にて、たへ可申  
 候、御禮はおせわしき内にも、  
 かならず、おて給はぬやうにと  
 存候、よき便りに候見せ置下  
 候へかし、申上候こととは山々な  
 れども  
 思ふて心の内にのこしおきて  
 又逢ふまでのなぐさめにせむ  
 なにもめでたくかし  
 むつまじき月十一日

の米、ちよとはづして、御も  
 らひ申上候あたらしきは、どこ  
 にもあり、手なれたがほし。  
 英國の保守  
 英國の國民性は何事でも、何事に  
 就ても氣長に堅實にやる。殊へば  
 家を建設するにしても、初代は一  
 階を作り、二代は二階、三代は三  
 階と云ふやうに、代を累ねて積み  
 重ねる風であるが、米人となつて  
 五層でも十層でも一舉にやつての  
 ける云ふ相違がある。曾て米人  
 は英國の老生が薩摩事であるの  
 に感じて、どうすればソナにな  
 ると蘭丁に問ふたら、蘭丁の云ふ  
 には、ナンでもないことだ。時々  
 水をやつておぼれれば、時々  
 土をかけるのだ。そうすれば  
 百年位も立てば、必ず立派にな  
 ると云ふたのは、米人が氣の長  
 い話に一驚を感したと云ふ。日本  
 人も何れかと云ふと、蘭丁は米利  
 用主義で、兎角事功を急ぐの弊があ  
 る。



北越新報

所行發 長式行印 司會社 長式行印 社報新 長式行印 郎吉留 長式行印

No. 166

春城漫談

植物界の奇観(下)

植物界の如きものを分る... 樹から樹が葉に傳つて、宛がらぬ...

ことが分つた。噴ら野虫(アブラムシ)の分泌物であつた。雨米の...

なつてゐる。その重量は五貫目だ。至七貫目もある云ふから...

北越新報

所行發 長式行印 司會社 長式行印 社報新 長式行印 郎吉留 長式行印

No. 167

春城漫談

市の風景



太田道灌と

山吹のみの一つだに、無きぞ哀し... 一片の道灌もそれに感じて和歌に...

讀少女不言花不語、英雄心緒... 風如米」とはこの間の消息を漏らしたものであらう...

魚類の國際交換... 動物學者石川千代、藤原七、いつぞや共に...





刊夕 北越新報

No. 169

春城漫談

市山

同盟罷業と



であつた。あの頃の罷業はなかなか... 同盟罷業も追々組織的となつて来た。

は東京の場合と同様であつたが、... 同盟罷業を一つして高野山と...

出来ぬ。近來罷業部屋と云ふ一種... 手は及びかねる處から、同盟も妻...

敵愾文字の看板... 日露戦争の時敵愾の氣は全國に充...

露國人のツボラ... ツボラは「アボン、ネボン、カ...

No. 168

春城漫談

市山



偉人の暗黒面... 昔から英雄氣概に著せられた...

行があつて、他人の妻でも自から... 武田信玄が其の重臣田原守...

と家から取り寄せることが出来... 武田信玄が其の重臣田原守...

大徳寺の焼香場... 香焼の祖屋五重は、讃岐京...

露國人のツボラ... ツボラは「アボン、ネボン、カ...

前田徳義院、持香報香院記... 位未成、栗田勝家、信雄日...





# 北越新報

No. 174

## 春城漫談

### 市の風景

#### 反故八景



個人が遊んで眺めないやうなものであつても何等かの意味があつたり、一参考になるやうなものは棄すに非

に收めるのが常となつてゐる。勿づけてある。これ等の蒐集から會て反故八景といふを察したことがあつた。まだ適當に記述し得るやうに熟して居らぬ。しかしその一端を云ふと小片の反故は書畫會のチラシや、いろ／＼の雑誌や商標のやうなものや昔や雜草に比すべきもので引きたないものである。中には山景に擬ふべきものもある。谷山の粉本などはそれ自身山であるが、それを云ふのではなく、崇山峻嶺に比すべきものは高僧や英傑の肖像像などである。大河長江に比すべきものは横長の物であり、雲煙に擬すべきものは黒ずんだ採木や煤ばんだ古くは茶番や富貴などは市街に擬すべきもので、各所圖内記に社札の如きは露路に擬すべきものである。露路を擬するは世傳は花弁に擬すべく、船魚舟の圖など

は海洋に擬すべきであらう。その他屋宇樓閣に擬すべきもの、飛瀑長瀨に擬すべきものなど、數千の反故を寄せ集めて見れば大なる風景を見る如き思ひがある。

反故で考へべきものの中には人の繪に擬するものがある。さうな名畫の借形文だの、さる文藝家が師より破曉されて穿入れた繪文、有名新聞記者が押破の爲めに新聞社に寄せた正誤文などは、現に自分の所蔵にある。漢詩人の戯れに作つた俳歌や、トコトヤの初版の、嚴古の新聞の第一版だの、憲法發布の際の法廷の儀を打撃した電報文や、鶴有禮の刺殺された時のクドキ龍や、馬琴の八犬傳、種彦の田舎源氏原稿の斷片や、牛肉や石油を賣出した屋敷の引札や、坂野書や、この類の類には並べ書き切れない程數々ものがあるが、今は僅に反故の風味の一端を云ふに過ぎぬ。

▲國防館

前記事は請負の金額が今日まで

# 北越新報

No. 175

## 春城漫談

### 市の風景

#### 景色と吝嗇



とを欲しないやうな趣きがあつて、横夫野客のやうな風流氣のないも

その附近に茶を喫する家もなく酒を賣る店もない。晴曇たる街道を踏まねば鐘り鐘いから、富貴に居るものなどは鐘りかねる。勿論一錢の金でも仕ふべき所がない。絶佳の風景と金銭とは全然縁が無いかに見える。漸く交通が開けるとそこに茶屋がかり飲食店が出来旅籠が起る。こゝに始めて金をつかふべき所となるが、風景はそれだけ俗化して自然の風景が損はれぬ。實は山景水景は俗化が損はれないかも知れない。今の成金達には山水秀麗の地を選んで壯大な別荘を築き盛んに贅澤をやるが、兎もすると一夜の間に、その全部を流されて仕舞ふやうな災禍が起る

必竟風景の美なる所には、山かあり谷あり瀟灑があり飛瀑などあつて、もと／＼危険地である。最も危険な所は、その最も危険な所は、そこを避けて幸災を祈へたりするで、斯る災禍に遇ふのである。

ブルジョアを羨むプロレタリアは、これを見て驚嘆をやる天罰たは、自然を羨むことを知らない成金の神に從つて知らぬ山景水景の美に驚嘆をやるから、山景だと云ふが、自分は必ずしもそれと異なるものではないが、山景や水景に對しての付け届け、乃ち税金の拂ふのだと解したらよくはあまいか。

好風景と金銭とは縁が薄いやうな観がある。どうも好風景の地に居るものは、生活が質素でつましく免れずと吝嗇の徳りを受くるやうな性質がある。實は儉素と吝嗇は隣家、儉素が良だしな風土と吝嗇にもなるのだが、何故に風土と吝嗇と縁があるのか、その解あらうか、自分は久しい間その解を得たと思ふた。日本の國民性は、それかと云ふと金づかりの術が、それが、それが一般的に言ふところであつて、細かに地方に就て見ると、風景を以て誇りとする京洛の近江だのと云ふと、住民が儉素でつましいので誰れにも目にもつかぬ。京洛が帝都たる資格を失つても、尚ほ日本の体面を維持してゐるのはその儉素の徳りに據るのである。江州と云へば一風俗を有する商人の故郷で、その富に於てはその儉約に於てその徳地に於て商人を長裕せしむるほどのものである。兎もすると兩地の人々皆吝嗇を受けると儉素の資格を有つてゐる。この頃新渡戸博士の「東西相觸れて」を讀んで見ると、博士が各國の國民性を論じて吝嗇の風があると特記した處はスコットランドと瑞西であるが、それが共に風景の總作を以て世界に名高といふであつて、スコットランドの住民は吝嗇よりも一歩を進めて、物を買つても却つて價を擡げ

ないのを窺ふ誇りとするの點が、共に風土のよい地である。斯く東西となる點は何故であらうか、私は敢て風土を得たとは云はないが、風土を得た處は、山景水景が豊富で、その自然美が多いたが、人間の生活に必要なる土地が狭く、食料を得ることが困難であるために、勢ひ儉素とならざるを得ないのであるまいか。外國では日本と異つて個人主義が盛んであるが、風景地は山に隔てられ河に遮られたりして自然の風土を養ふのはあるまいか。我々の京都も舊都ではあるが山國であり、近江には大なる山もあるが大なる湖水もあつて、共に風景に富むだけ耕地が狭いので、彼れが如き儉素の風を習つたのであるまいか。極端に吝嗇するに吝嗇を以てするは、甚だ不徳の處があるけれども、その間には自然の因縁があるかに思はれる。

後 佐



















刊夕

北越新報

日十二月六

所行發 目丁二町上之坂市岡長 社報新西北 社會式株 社報新西北 社會式株 社報新西北 社會式株

No. 185

春城漫談

市山遺愛の骨

董群 (上)



てまで自分に罪を託する人があ... 山陽の遺愛を納

めた三十八日に... 山陽の遺愛を納

して寄せられた... 山陽の遺愛を納

の珍物が招か... 山陽の遺愛を納

石の珍物で山... 山陽の遺愛を納

No. 184

春城漫談

市山遺愛の骨

董群 (上)



の娘をばやん馬に... 山陽の遺愛を納

通例でなくと... 山陽の遺愛を納

から、人情味は... 山陽の遺愛を納

オードが電女... 山陽の遺愛を納

して一ツ馬に... 山陽の遺愛を納

刊夕

北越新報

日九十月六

所行發 目丁二町上之坂市岡長 社報新西北 社會式株 社報新西北 社會式株 社報新西北 社會式株

No. 187

刊夕

北越新報

日二廿月六

所行發 市岡長 報新北 社報新北 郎吉留岡佐

春城漫談



市崎の尼寺

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

(二)

No. 186

春城漫談



市崎の尼寺

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...

市崎の尼寺... 市崎の尼寺は、...



No. 189



岳麓の五湖に

春城漫談

北越新報

日四廿月六

所行發 町上之坂市岡長  
社報新越北 社會式株  
郎吉留藤佐 輯人印發

へは先づ指をこの湖に屈するものが、常となつてゐるが、今は湖の規模

見ればほどでないのに失望した。... 湖の形に似て、湖中に島の島と... 岳麓の五湖に... 春城漫談... 日四廿月六... 所行發 町上之坂市岡長...

No. 188



岳麓の五湖に

春城漫談

北越新報

日三廿月六

所行發 町上之坂市岡長  
社報新越北 社會式株  
郎吉留藤佐 輯人印發

発し、御殿場下車して、先づ山... 岳麓の五湖に... 春城漫談... 日三廿月六... 所行發 町上之坂市岡長...

つたので、一行は仕合せよしと悦... 岳麓の五湖に... 春城漫談... 日三廿月六... 所行發 町上之坂市岡長...





No. 193

春城漫談



市崎才藏

一日のドライブ

近頃の一快は、都外に一日のドライブ... 春城漫談の序文部分

分の宗家の別荘がある... 春城漫談の本文部分

No. 192

春城漫談



今泉岫雲翁

神戸に在る今泉真幸氏より其先人岫雲... 春城漫談の序文部分

受けたが、その後自分は... 春城漫談の本文部分

夕刊 北越新報

日七廿月六... 刊行所

岩船在田中村等を... 夕刊の本文部分

要は二人を別開式及び夜會

閉會式

所行發 日二町上之坂市岡長 社報新越北社會式株 社吉留藤佐

春城漫談



市崎の春

市崎に在る今泉由雲翁... 翁の遺稿を整理せられたのは数年前であつた。...

岩船在田中村等を襲撃すること... 明治六年に至り、漸やく岩船郡聯合高田村に居を定め、...

あの子の子をあとに... 月にかかれ花に迷ふの如き... 今よりのちそわか世りける

春城漫談

市崎の春



市崎の春... 一日のドライブ... 市崎の春は、城外に一日のドライブ... 一日のドライブ... 市崎の春は、城外に一日のドライブ... 一日のドライブ... 市崎の春は、城外に一日のドライブ... 一日のドライブ...

市崎の春... 市崎の春は、城外に一日のドライブ... 一日のドライブ... 市崎の春は、城外に一日のドライブ... 一日のドライブ... 市崎の春は、城外に一日のドライブ... 一日のドライブ...

市崎の春... 市崎の春は、城外に一日のドライブ... 一日のドライブ... 市崎の春は、城外に一日のドライブ... 一日のドライブ... 市崎の春は、城外に一日のドライブ... 一日のドライブ...

巖船二八を引用式及び夜會

開會式







# 北越新報

日三月七

所行發 目丁二町上之坂市岡長 社報新越北 社式有發 郎吉留藤佐 朝編行印

No. 198

## 春城漫談

### 市崎表

#### 佐久間象山の遺事



象山は漢語の人で早く開國論を主張し、それがために幕府の疑念に悩まれて瀕死した。吉田松陰が國難を犯して外國船に投じた事件の背後にも象山がいて、

にもこの書にチャント手段方法が備はつてゐる。外交家は宜しくこれを準備として事を處すべきである。この場合の例を分類して、この場合はこれの場合の例と、一目瞭然然然に便するの書を作つた。象山の遺事を語るものは皆この事に言及しないが、自分はその寫本を有してゐる。國際公法など云はずに春秋を外交の規範とした所に象山の見識がある。象山は立派な漢學者だが、多くの漢學者はその學問を殺してゐるのに象山は常に活用してゐる。曾て漢書と論語を著して、易を以て經緯を論じたことがある。この書は象山自筆で自分の交はりある諸家宮本仲氏が所持してゐたが、惜しいかな大震災で亡びた。象山は漢學者である

# 北越新報

日四月七

所行發 目丁二町上之坂市岡長 社報新越北 社式有發 郎吉留藤佐 朝編行印

No. 199

## 春城漫談

### 市崎表

#### 日本橋々上の一儒



ひびである。正説はこれである。序に二儒が日本橋の上に邂逅した話を更らに委しく紹介して見よう。實はこの話は當時文苑の

物が話し合つてゐる。一方には富嶽が遠く天半に聳えてゐる。その幅の上頭を書かれてゐる鳥賀の詩を讀んで茶山と鳥賀であることが直に領づかれた。その詩は  
身是國東醉學士、公是西備茶山翁、日本橋上笑相見、共指天外芙蓉峰、都下開傳爲奇事、便入寫山圖中。  
この詩に所謂國東醉學士は鳥賀自から云ふのであつて、末句寫山翁圖の中に入ると云ふのは文鳥の畫が日本橋の上に出遇つた丈では奇と奇とするに足らない。必ず何か仔細があるであらうと思つてゐる。内二編日記といふ小冊子を得た。これは茶山が西備に歸る時

刊夕

# 北越新報

日五月七

所行發  
目丁二町上之坂市岡長  
社報新越北社會式株  
郎吉留藤佐 輯編行發  
人編印發

No. 200

## 春城漫談

### 市島長成

#### 講義よりも談話



あるが、講義を聴くのは極して身  
に染まぬ。月日を経ると十に八九  
は忘れて仕舞ふ。講義は多量に對  
して説くのだが、各個に對して  
説くよりも切でないからだ。一番  
身に染みて修養となるのは、師に

たり、或は師と旅をするやうな門  
人が他の門人よりも多く得る所  
のある所以は、質問に對して適切  
の答へを得るのは勿論だがそれ  
のみでない。師は門生の短所も長  
所も知つてゐるから、その門人限  
りの訓を垂れる。折に觸れては師  
が平生考へてゐることで發してあ  
ることまでも聞くことが出来る。  
如斯ものは講義では聞き難いもの  
である。師の頭腦に蓄蓄する所の  
ものは豊富であつて、それが適當  
の機曾に觸れてこそ出れ、講義に  
は觸れてその機曾が無い。師の左  
右に居るものや師に従つて旅行な  
どするものには、それを聴くの機  
曾がある。兎もすると師が放談の  
説まで聞かずに説くこともある。  
斯る場合聞いた談話なり訓誨な  
りには身にしみて講義はすべて忘れ

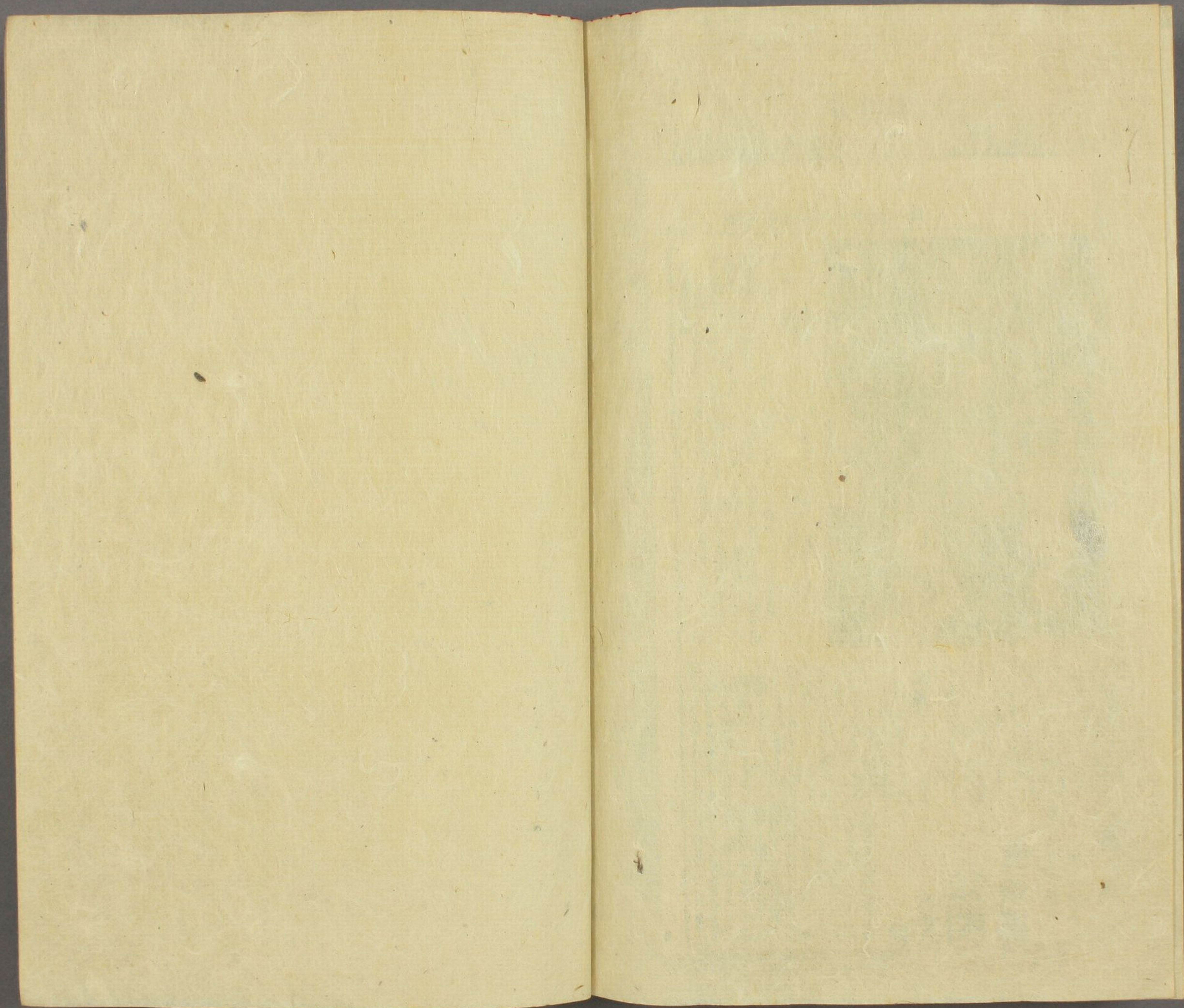
れても、後まで侯の談話の相手となつて不知不覺侯の氣味を受けたことか少くない。單に習熟的に感化を受けたのみでなく人格的にも得る所があつたやうに思ふ。帝大などで學んだことは全考へて見ると、假令業地を作つたにしても、下種のものでもないが、侯に因つて得た氣味は非常のもので、自分の頭腦も人格も龍米のものだが、いくらか取るべき所がありとすれば、それは侯の聞かぬい氣味に依るものと云はねばならぬ。

ても、これは終生頭腦に存じて忘れず、往々それがヒントとなつて自ら發明することもある。師に隨伴するものは自然師の一舉一動が何を意味するかを推測し得るやうになる。必ずしも談話を聞く必要しない。だから師に就て眞に學ばんとするには、師の左右に居ることであり、師に隨伴することであつて、それが甚だ便利な環境である。學問ばかりでなく、すべて藝術なども内弟子とならねば本當の修業が出来ぬと云ふてるものも、生徒の間が親密であることが大切で、時寄り先生の宅を訪ふたり、先生と遠足をしたりすることが良い習慣で、西洋では學生を伴ふて先生が策する中種々の談話を交へる習慣があるが日本でもその慣習が欲しいものだ。

自分の經歷に就て以上の實例を案ずるに、自分に大衆教育以上の業を興へた人が二人ある。一は大衆教育で、自分は三十餘年開講して侯の左右に侍し百餘の談話を聞いた。旅行には大衆隨伴して侯の外出の時は勿論、旅館に居ら







以下全て  
白紙

